

あなただけ今晚はプロデューズ

シアター・トップス 提携公演

あなただけ今晚は P a r t 6 上演台本

ラ・鳥賊ホテル

(一九九五年)

〔人物〕

くちだ

朽田 ケイ（四十歳）

さぎかす

鷺粕 りか（三十五歳）

はら

よいこ

原 宵子（三十歳）

こいずみ ずいこ

小泉 髓子（二十五歳）

わたしの揺りかごのそばに立っていた天使が言った。

なにも知らないしあわせな者よ、

行って愛しなさい！

この地上に何ひとつお前を助ける者がいなくても。

(1)

音楽” DESDE LEJOS (From Far Away)” → ON

明かり入ると、ひとりの女が、水色の封筒と便箋を手に立っている。

原宵子である。

宵子

(手紙を読む)

“前略。ご無沙汰しています。元気ですか。僕は元気です。僕を覚えてますか。

僕は君を覚えてます。鳥賊浜にきませんか。9月23日はどうですか。

海のそばに『鳥賊ホテル』という家があります。ばあさんがひとりです。住んでる小さな家です。よかったら一緒に泊まって、よかったら一緒に寝ませ

はるのはやて

んか。僕をうらんでますか？ 原宵子さま。春野疾風”

・・・はやて・・・。

宵子、手紙から目をあげる・・・。

宵子の明かり落ちる。

音楽、暫し残って・・・波音と重なり・・・。

烏賊ホテルの一室。夕刻。暴風雨。

舞台中央にドア。その左右に窓。

上手にドア。別の部屋に通じている。

下手に簾の衝立て。ハンガーにかけたガウンがひっかけてある。

そのそばに、マコロンのダンボール箱。

上手窓の横に本棚。本や雑誌が無造作にならべられている。

ソファ、テーブル、クッション、マコロンの空き袋などなど . . .

乱雑な一室である。

部屋着姿の朽田ケイが、ソファに腰かけて『まどろみ』という小冊子を  
読んでいる。

更に強くなりそうな雨と風が、窓ガラスをたたいている。

ケイ

(小冊子をポンッと放って) . . . だるい。気圧のせいかなあ(マコロンの  
ダンボールの中を見るがからっぽ) マコロン . . . 食べたい . . . (窓の外を見  
る。風雨が激しい) 電気消えるかしら。お化け、出たらやだなあ。きらいよ、  
お化け . . . (上手窓の外に何かが見えた気がする) ? . . .

上手窓のカーテンを閉めるが . . . カーテンの影からおそるおそる外  
を覗く。

ケイ なんにも・・・いるわけないじゃん・・・ふふふ。

ト、ソファに戻ろうとした時、下手窓の外を、なにかが、よぎる。

ケイ ?!・・・(怖い)

意を決して、下手窓に近づくケイ・・・誰もいない。

カーテンを閉めて、ソファへ。が、カーテンが揺れているような気がするし、ハンガーのガウンが気にかかる。

ケイ、ガウンをハンガーからとり、ソファにポイし、下手窓のカーテンを開ける。

ケイ そう、このほうがいい・・・(窓の外を覗く。木の枝がザワツとする。ビクツとする)もおツ。歳を考えなさいよツ歳をツ。でしょ。ましてミステリー作家なんだよ、あんたはッ。あー、マコロン食べたいッ(マコロンのダンボールをけつとばし、上手窓のカーテンも勢いよく開ける)

窓の外、鷺粕りかが、ニヤツとして立っている。

ケイ きゃああーッ。

ドア、開いて、りか、飛び込んでくる。

白い雨具を着て、毛糸の帽子と靴下をつけている。

りか 　ど、どうしたんですッ先生ッ。

ケイ 　やだやだやだッ！どーしておどかすのよおッ。心臓弱いよ、あたしは。知ってるでしょう、りかさん。

りか 　すいません。

ケイ 　・・・なによ、その変装。

りか 　変装だなんて人聞きの悪い。この雨ですもの（バサバサと雨具を脱ぐ）はい、先生、郵便物。濡れちゃってましたよ。お買い物もしてきました（袋を差し出す）

ケイ 　あ・・・もおッ、うれしい。だから好きさ、りかさん。

りか 　（袋から出して）イカの塩辛。レバーの醤油煮。

ケイ 　マコロン買ってきてくれた？

りか 　アンコウの肝。カニミソ。

ケイ 　マコロンある？

りか 　フオアグラの缶詰。猿の脳味噌、これはお値打ちもんですよ。

ケイ 　・・・内蔵関係ばかり。

りか 　（きつぱりと）マコロンはないッ。売ってなかったー。

ケイ 　・・・。

りか 　先生、お菓子ばかり食べてちゃダメです。こーゆー栄養価の高いものを食べなくちゃ。ご飯、炊きましょね（ト、上手ドアに消える）

ケイ 　・・・これだって、ものすごく栄養、偏ってるんじゃないの？

りか（声） 　マコロンはないッ。

ケイ、郵便物を手にとって開ける。

ケイ DMばかりなんだよねえ・・・(DMをゴミバコにポイして、書籍小包をあける。“春野疾風シリーズ4“春野疾風の死と復讐”というタイトルの本である)・・・ふうん、まあまあ装丁だね。

ケイ、本をぺらぺらとめくって、本棚にぽんと入れる。

ケイ (窓の外を覗きながら) ねえ、りかさん。雨、ひどくなりそうだねえ。今日泊まってくう？(奥へ) あのさ、おみおつけ作ってね。あと、おしんこ。あたし、それだけで食べる。内蔵関係は、りかさんに任せる。

りか、出てくる。

りか 『まどろみ』に目をとめて) あら、こんな週刊誌出たんですか？ねえ、先生、麻原彰晃って子供十八人もいるんですってねえ。知ってました？載ってるかな、あの記事。麻原・・・麻原・・・

ケイ あのさ、りかさん、それ、女性週刊誌じゃないのよ。文芸誌。

りか あら、そうなんですか。どうりで地味だとおもった。グラビアページもないし。『まどろみ』なんていうから、あたしは、またてっきり『微笑』の別冊かなんかだと。あら、先生の名前が載ってるわ。作文、書かれたんですか？えーと・・・97ページ。

ケイ エッセイ。

りか あ、あったあった。先生の作文・・・わたしのゆとり空間。朽田ケイ”これね。なになに“海辺に建つ小さな家を別荘として持ってから、はや一年近くがたとうとしている”あ、このこと書いてらっしゃる。“古い知人の西貝

教授から、この烏賊ホテルと呼ばれる家をゆずりうけて・・・” あら、先生。

先生は、西貝先生から直接、ここをお買いになったんですか？

ケイ りかさん、西貝先生のこと知ってるの？

りか 東京の大学の先生でしょ。去年の八月頃かしらね。お店に来てくださったことがありました。

ケイ へえ、りかさんのお店に。

りか ええ。この正太さんと、亀田さん、烏賊浜駅前にある不動産屋の社長さんなんですけどね、お三人で。西貝先生、あのあとすぐに、この家をお買いになったみたいだったけど・・・でも、すぐに先生に売っちゃったんですね。

ケイ 去年の秋に、西貝先生から、烏賊浜ってところに別荘を持ってるんだけど、よかつたら、君、使わないかって言われてね。

りか 使わないかって・・・あら、じゃ先生はお買いになったんじゃないんですか？ あらま、ひよつとして、先生つたら、西貝先生の愛人だったんですか？

ケイ まさか。急にお金が必要になったらしくて。

りか 西貝先生がですか？

ケイ そう。なんでも汚職事件にまきこまれちゃったらしいのよね。

りか オシヨクジケン？まあ素敵。

ケイ すてき？

りか で、どこのオシヨクジケンですか？

ケイ さあ。詳しくは知らないわ。聞くのも失礼だし。とにかく、ここを売りたいって。

りか で、先生は、おいくらで？

ケイ 千五百万。

りか ええは

ケイ うん。たいして坪数もないし、家だって古いし、その上、こんな辺鄙なところとは思っただけど、西貝先生には、あたしが編集者だった頃に、いろいろと、お世話になってるし、断れなかったのよね。

りか それにしたって先生。千五百万のおシヨクジケンなんて・・・それ、どこの店です？

ケイ 店？

りか だって、おシヨクジケンっていったらあれでしょ、しゃぶしゃぶ食べ放題とか・・・

ケイ あ？

りか いったい、どこの肉なんだろう。

ケイ ……。コーヒー飲もう（ト、上手ドア奥へ去る）

りか あらやだ、先生。あたしが入れますう（追う）

ケイ（声） りかさん、リクルートって知ってる？

りか（声） スーツの名前でしょ。

ケイ（声） 江副は？

りか（声） は？まずぞえなら知ってますけど・・・あ、もしかして・・・おシヨクジケンって・・・。

ケイ、マグカップを手に出てくる。

不機嫌そうにソファに座ってコーヒーを飲む。

りか、コーヒーサーバーとミルクを手に、モジモジしながら出てくる。

りか 先生ったら、あたしにわかるように、ちゃんと話してくださいさなくちゃ。

ケイ ちゃんと話しました。

りか　　そうですかあ。あたしはまたてつきり、しゃぶしゃぶ食べ放題・

ケイ　　ミルク。

りか　　はい（ト、素早く入れる）・・・でも、あれですね、先生。西貝先生も、災難でしたねえ。

ケイ　　まあね。

りか　　・・・あたしね、やめたほうがいいって言ったんですけどねえ。

ケイ　　やめたほうがいいって？

りか　　この家買うの。縁起の悪い家ですもん。ろくなことないんですよ、どんどん人が死ぬし。

ケイ　　えー?!

りか　　あらやだ。先生、知らなかったんですか。男が住む家じゃないですよ、ここは。

ケイ　　な、なによそれ・・・。

りか　　先生は平気よ、女ですもん。・・・やっぱりあるのね、ここ。このあたりじゃ昔から有名ですから。烏賊ホテルっていつて。

ケイ　　その名前は、西貝先生から聞いてたけど・・・ねえ、あるって何が？

りか　　だからね、前、ここに住んでいた女の魔力。

ケイ　　うそッ。

さが

りか　　ホント。魔力っていうか性ってやつかしらね。きっと崇られたんですよ、西貝先生も。

ケイ　　崇られた・・・？

りか　　あたしは烏賊浜の生まれじゃないから、よくは知らないんですけど、店やっていた頃、なんべんか聞いたことあります。小泉とわのこと。

ケイ 小泉とわ？

りか ええ、前にここに住んでいた女です。正太さんって、ほら、西貝先生と一緒に、うちの店に来たことあるって、さつき言ったでしょ。その人の母親。

ケイ ふうん……。

りか 正太さん、今は東京でホストやってるらしいですけどね。

ケイ その正太って人、崇られたの？

りか いえいえ、正太さんは全然。いたってノーテンキな男の子で。あんなパツパ  
ラパーじゃ、崇りもへったくれもないでしょうよ。それに正太さんは、小泉  
とわの息子ですからね。問題は正太さんのおとうさん。

ケイ おとうさん？

りか 正太さんのおとうさんばかりじゃないんですけど。ずいぶん昔の話になる  
んですけどね。その小泉とわっていう女は、なにせ身持ちの悪い女で、何人  
も何人も男ひっかけちゃ、死なせてるの。

ケイ 殺したの？

りか そうじゃなくって、昔っから、とわとくつついた男は、みんな死んじゃうら  
しいんです。正太さんの父親ってのも……ほら、延正寺ってあるでしょ。  
あそこの住職だったんですけどね。コロリといっちゃったんですけどよ。ま  
だ若かったらしいですよ。ま、小泉とわも、昨年、死にましたけどねえ。

ケイ へえ、死んだの……。

りか 西貝先生から、なんにも聞いてなかったんですか。

ケイ そういう話は全然。

りか そうですか。西貝先生も詳しくはご存知なかったのかもしれないねえ……。  
こずるい奴でしたから、あの不動産屋。

ケイ え？

りか 亀田さんっていう、うちの常連だった不動産屋の社長。西貝先生を、二、三度つれてきたことがあって。まあ、陽気にカラオケ歌ってねえ。西貝先生はさすが大学の先生だけあって、英語の歌を歌うのよ。ビートルズないか？とか言われて。ありませんでした、うちには。無理よねえ、ビートルズなんて。ずうとるびじゃないのよ。

ケイ ……ずうとるびあるほうが珍しいかもしんない…。

りか 調子いいのよ、亀田さんは。西貝先生は、世間知らずの学者さんだから、すつかり騙されちゃったみたいで。亀田さん、こう、西貝先生の肩なんかたたいちやってね、よしッ、飲もう。ママ、ボトル入れて、オレのつけだッとか言っちゃって。で結局、払やしないのよ。店、亀田さんのせいでつぶれたみたいなものだわよ。好きくなかったなあ、あたし、あの男。…ま、店はつぶれましたけど、あたしはこうして先生に雇っていただけ…。感謝してます。あたしね、ちょっと鼻が高いの。だって、先生みたいな売れっ子作家さんの秘書だなんて。

ケイ そんな…あはは…。お手伝いさん、ね。

りか え…。

ふたり、微笑みあって ……妙な間。

りか さてつと、ご飯炊いてる間に、お掃除しちゃいましょうかね。

ケイ ええ？今から？

りか そうですよ。この天気じゃお洗濯は無理でしょ（上手ドア奥へいきながら）せんせ、やっぱり、乾燥機買いましょうよ。東京ガスから出てるじゃないですか。キンタだとかコンタだとかいうのが。

ケイ (呟く) 乾太くん……。ねえ、りかさん。

りか(声) (奥から) はあ？

ケイ さっきの話だけど。この家、祟りがあるって……。もしかしてさー、あたし、今年になってから体調悪いじゃない。ずっと不整脈だし。それってさー。

りか、掃除機を持ってでてくる。

りか 先生の心臓は持病でしょ。

ケイ うん。でも、この春……。原稿おとしちゃったし。初めてよ、あんなこと。

りか 風邪が治らなかったただけじゃないですか。夏からは調子出てきたんだし。大丈夫ですよ。この間、なんか書いてらっしゃいましたよね。あれ、書き上げられたんでしょう？

ケイ うん……。一応。

りか ほーら。気になさることないですって。

掃除機、ガーガーはじまる。

ケイ ……(ガーガーがうるさい。うんざりする)

ケイ、上手ドアのほうへ。

りか あら、すぐおわりますよ。

ケイ うん……。ちよつと横になってくる。なんかだるくて。気圧のせいね。

りか 気圧？デリケートでいらつしやるから、先生は。あたしなんか、上が二百ま

であがってもピンピンしてます。ちょっと血の気ぬいたほうがいいなんて献  
血車の人に言われて。でも、ジョア一本で、血ぬかれちゃあねえ。

ケイ

(呟く) それ、もしかすると血圧のことかもしれない・・・おやすみ(去る)

りか

(明るく) はい、おやすみなさーい。

りか、掃除機をかけ始める。

りか

(「いとしのマックス」を、何故かコブシをきかせて歌い出す)

♪ まっかなドレスを君にイ 作ってあげたい君にイ

愛しているんだよ ステキな君だけを

ト、そこへ・・・宵子、窓から、覗き込む。

りか

♪ Hey Hey Macks won't you be my love

そして 君と踊ろう

宵子

(ドアを開ける) あの・・・

りか

♪ マックス 淋しいんだよ マックス 抱いてほしいのさ

宵子

あのおッ。

りか

♪ ドウドウドウドウドウ ドウドウドウドウドウ ドウドウドウドウドウ ド

ウ

二人

♪ ゴウ。

りか

？

宵子

こんばんわ!

りか

・・・なに、あんた。

宵子 烏賊ホテルってこちらですよ。もう、看板もなーんにも出てないんですよ。雨の中、探しちゃいました。すいません、シングル・

りか シングル？

宵子 あ、ダブルのお部屋を。うふッ。

りか うふッってなによ、あんた、うふッって！ファンの人なら、今日はだめよ。

先生は今日は、お会いできません。

宵子 え？・・・あのお、ここ、烏賊ホテル・・・ですよ。

りか 昔は、そんなふうに呼ばれていたこともあったみたいですけど、今は違います。

現在は、あの有名な女流ミステリー作家、朽田ケイ先生のご別宅です。ちなみに、あたくしは秘書の驚粕りかと申します。

宵子 朽田ケイって、あの朽田ケイ？

りか (得意) まあ他にはあんまりいらっしやらないと思いますけど。

宵子 あの“春野疾風シリーズ”の朽田ケイさん？

りか 春野疾風？

宵子 ええ。

りか それと、うちの先生とどういう関係が？

宵子 え？・・・あなた、お手伝いさんのくせに知らないんですか？

りか 秘書・・・。

宵子 “春野疾風シリーズ”は朽田ケイのヒット作でしょ。

りか ヒットって・・・ええッ！？せ、先生が、か、書いたの？!

宵子 確か、もう何冊か出てるはずですけど。あたし、二冊読んだわ。へえ、ここ、

朽田ケイさんのお家なの・・・(ト、本棚を眺める)

りか (眩く)・・・先生の本って・・・なに・・・？それ・・・。

宵子 ほら、あるじゃないですか(ト、本棚の本を手に取り)これこれ。

りか え・・・？

宵子 (本をペラペラとめくって) このシリーズ第一作は傑作だったわ。疾風の登場のシーンがいいのよね・・・あ、ほら、(ハハ)。

風音 。

宵子 (読む) “沖から強い風が吹いてきた。春の嵐である。渚には、色とりどりの貝殻たちが、あたかも男に遊ばれることが宿命の女のように、さんざめいていた。美しい貝殻のひとつが、男の裸の足を刺した。男は微かに眉根をよせ、それを手に取り口に含むと、軽い音をたてて砕いた。貝殻は、男の唇からこぼれ、渚に消えた。「僕をうらむかい？」そう呟き、男はふつと微笑ん

さだめ

しっぷう はるのはやて

だ。春の疾風・・・春野疾風・・・渚にたたずむその男に、神は、その時、そう名付けた・・・” なーんかセクシーじゃありません？これが春野疾風の誕生よ。

りか ぜんっぜん知らなかった。

宵子 あー、これ、二作目だわ。『グードゥー人形の呪い』これは笑えたわね。

りか グードゥー人形?!ちよつと見してッ! (ト、本をひったくる)

宵子 ……あなた、本当に秘書?

りか (必死でページをめくっている)

宵子 ねえ、酒粕さん。

りか 驚粕ッ。驚粕りか。

宵子 疾風は、まだ来ていないのね。

りか　？・・・どういうこと？

宵子　あたし、疾風とここで待ち合わせしてるんです。

りか　待ち合わせ！？

宵子　ええ。

りか　疾風が・・・春野疾風が、ここに来るっていうの？

宵子　そう。

りか　・・・ありえない・・・。ありえませんッ。

宵子　（苦笑して）なんで、あなたにそんなこと言われなくちゃなんないのかなあ。

今日のこと、疾風から聞いてませんか？あたしのこと聞いてないですか？

あたし、原宵子っていいいます。

りか　聞いてない聞いてないッ。せんっせん聞いてない。聞いてるはずがないッ。

宵子　・・・あなたって・・・なんだか、へん。

りか　・・・出て行ってちょうだい。

宵子　え？

りか　出て行ってちょうだいと言ってるの。

宵子　それはちょっとあんまりなんじゃないの。外はひどい雨と風よ。疾風が来る

まで待たせてくれたって。

りか　来ないッ。ぜえったい来ないッ！

宵子　あのねー、あなたねー。

りか　出ていきなさいッ（ト、宵子をドアの方へ）

宵子　ちよ、ちよっとッ。

りか、宵子をドアの外につきとばして、ドアを閉める。

りか つたくもうツ、冗談じゃないわよ。なんのいやがらせよ・・・（が、本が気なり手に取る）春野疾風シリーズ・・・ほんとだわ。こんな本があったなんて、今まで全然気づかなかった・・・。

ト、ドア・・・ドスン。

りか ？・・・（そおっとドアを開ける）

宵子が立っている。

りか しつこいわね、あなたツ。

宵子 なんかへんなもの・・・。

りか え？

宵子 なんかへんなもの、外に置いてありません？なんか丸くてぶよんとした・・・  
りか なんもん、置いてないわよ。

宵子 だって、ありましたよ。あたし、それにぶつかって、ぶよんとはねかえったの（スタスタ入ってきて）あー、気持ち悪かった。

りか そんなこと言って、居座る気ね。そうはいかないわよツ（宵子に激しいつっぱりをかます）

ト、ドアがすーっと開く。

二人 ？

小泉髓子が立っている。

臨月の妊婦。

髓子 (お腹をツンツンと指して) これじゃないですか？その人、これにぶつかったみたいよ。

りか ……あんた、誰！

髓子 小泉髓子。

りか なに？

髓子 小泉正太の愛妻です。

りか 小泉正太って…

宵子 (呟く) …愛妻なんて言うか、普通、自分で…。

髓子 へえ、ここが烏賊ホテルかあ。ふうん(入ってきて) いやはや、すごい雨。まいったまいった。

りか・宵子 ……(見てる)

髓子 あたしね、昨日、烏賊浜に来たの。正太さんのおとうさんの法事でね。で、今日は、このへん見物してたのよ。なーんもないんだねー、このあたりって。ほんで、帰ろかなって思ってたらこの雨でしょ。バスはこないしき、正太さんは、今朝、先に帰っちゃったし。それで、あって思い出して。

りか なにをツ？

髓子 前に正太さんが、烏賊ホテルっていう海辺の家の話をしてくれたこと。で、ちよびつと、雨宿りでもさせてもらおかなって。

りか あいにく、今は正太さんの家じゃありません。

髓子 知ってるわ。西貝さんっていう大学の…

りか でもないの。

髓子 あら、そうなの？そりゃ、しまったわ・・・正ちゃんったら、是非、寄って  
みなさいなんて。歓迎してくれるはずだからって・・・で、今は、おばさん  
が住んでるの？

りか いーえ。朽田ケイ先生のご別宅です。

髓子 朽田ケー？・・・誰？その人？漫才師かなんか？

りか なんですって？どうして、うちの先生が漫才師よッ。

髓子 だって、口だけーって。

宵子 あー、ほんとだあ。

髓子 ね、おかしいよね。へんな名前だよねー。口だけえー。あはは。ちなみにあ

た

しは小泉髓子。上から読んでもこいずみずいこ。下から読んでもこいずみ・

りか やかましいッ！

髓子 ……。ま、いいや（ト、ソファにずでんと腰をかけ、持参のキヤラクタ  
ーバッグからバナナ・オ・レを出すと、ちゅうちゅう飲み出す）

唾然とするりかと宵子。

タ

髓子 （ひとりごと）口だけえーだって（ぷッと吹いて）あ、吹いちやった（ト、

オルを出して、口を拭く）

りか でてけ。

髓子 ん？

りか 出ていきなさい。

髓子　ちゆう。

りか　な、な、な！

宵子　（止めて）この人、これ（腹ボテ）なんだから（ツツパリハヤメマシヨウの動作）ね、酒粕さん。

りか　鷺粕。

髓子　（宵子に）あなたも雨宿り？

宵子　ううん。あたしは、疾風と、待ち合わせしてるの。

髓子　・・・今・・・なんて言った？

宵子　え？だから、待ち合わせ・・・

髓子　その前。誰と待ち合わせしてるって？

宵子　疾風・・・春野疾風って人・・・。

髓子　・・・うそ。

りか　え・・・？

髓子　うそうそ。そんなはずないよ、ありえないもん。

宵子　（りかと髓子を見て）なんなの、あなたたち？疾風を知ってるの？へんよ、あなたたち。

りか・髓子　だって・・・！

宵子　だって、何？

りか・髓子　・・・。

宵子　あなたたちがなんと言おうと、あたしは春野疾風と待ち合わせしてるわ。ちゃんと手紙をもらったの。

りか・髓子　ええッ！？

宵子　な、なによおッ。

髓子　手紙って、春野疾風から？

宵子 そうよ。

髓子 ……見せて。

宵子 え？

りか 見せなさい、手紙。

宵子、なんだか嫌な感じだが、バッグから手紙を取り出す。

ひったくるようにして、それを読みりかと髓子。

風音 ……。

りか “前略。ご無沙汰してます。元気ですか。僕は元気です。僕を覚えてますか。

僕は君を覚えてます…。

髓子 “烏賊浜にきませんか。9月23日はどうですか。海のそばに『烏賊ホテル』  
という家があります。ばあさんがひとりで住んでる小さな家です…。”

りか ……ばあさん？…だれ？

顔をみあわせる三人 ……。

ぼーっとした顔で上手ドアより出てくるケイ。

ケイ りかさーん、ご飯、ピーツて鳴ったよ。炊けたんじゃない。

音楽。

暗転。

四人、テーブルを囲んで、夕飯を食べていたが

髓子以外は、もう箸を置いている。

髓子、茶碗を手に、ガバガバ食べている。

あてつけがましく食器を片づけているりか。が、髓子は、まるで、

気にしていない様子。

啞然として見ているケイと宵子。

風雨、激しくなっている。

髓子 塩辛って、ご飯すすんじやいますよねえ。カニミソもね（ト、ご飯の上の

せ）こうやって（海苔をちぎってその上にかけ）まぜまぜして食べると美味しいの。磯の香りがたっぷり。ぐふふ（ト、皆なに笑いかける）

ケイ ついてるわ。

髓子 は？

宵子 ついてるわよ。

髓子 ええ、ほんとツイてます。雨宿りさせてもらって、夕御飯までごちそうになつちやっつて。

りか ついてるって言うてんのッ。

髓子 感謝してます。

ケイ 歯に海苔がついてるのッ。

髓子 あ？（ト、取って食べる）ぐふふ。

ケイ、うんざりして煙草に火をつける。

髓子 (ケイに) ダメ。

ケイ え？

髓子 禁煙です。

ケイ そんなこと、誰がきめたのよ。ここは、あたしのうち・・

髓子 (お腹を指して) 非常識だわ。

ケイ (むかつく)

りか ドンブリ飯、四杯も食べる方がよっぽど非常識だとおもうけどッ。先生、お夜食のオニギリありませんよ。

ケイ いらないッ。なんにもいらないッ (いらいらして煙草をしまう)

宵子 普通、臨月近くになると、そんなにお腹すかないって聞くけど。

りか そうよ。そんなに食ったら、育ちすぎて産む時、苦しむんだから。

ケイ いーじゃない。あたしたちが産むんじゃないんだから。

りか・宵子 それもそーねえ。

いじわるうに笑う三人。

髓子 (箸をパタンと置く)

ケイ どうしたのよ？ 召し上がりなさいな。

髓子 そ、そんなイヤミ言われてまで食べたくありませんッ (ベンベン泣き出す)

髓子、バッグから、タオルを出し、目をぐりぐり拭く。



宵子 そうなの？大変ね。

髓子 ……あなたって優しい……。

宵子 べ、別に、そんなんじゃないけど。

髓子 (バッグから菓子パンを取り出し) あげる。

宵子 え？…カレーパン……。

髓子 嫌い？あんこパンもあるけど。

宵子 ……こういうの、いつも持ち歩いてるんだ。

髓子 そう。あいつらには内緒ね。あいつらにはあげたくないの。

宵子 ほしがらないと思うわ。

髓子 どっち？

宵子 え？

髓子 コロッケパンもあるのさ。

宵子 気持ちは嬉しいんだけど、なんだか貰いづらいの。

髓子 わかるわ(ニコツとして、マコロンの袋を出す) いかが？

宵子 ……。(ひとつ、つまんで) ありがとう。

上手ドアから出て来たケイ、はッとして立ち止まる。

ケイ ……あ……。

髓子・宵子 (振り向く)

ケイ ……マコロン……。

宵子 え……。

ケイ (カーテンなどいじくりながら) いーなあ……マコロン……。

宵子 あ、よかったらどうぞ。(髓子に) いいわよね。

ケイ、とんでくる。

マコロンを食べるケイ。

ケイ うふふふ。

髓子・宵子 …… うふふふ…。

ケイ (二、三個まとめて取って) りかさんねが、買ってきてくれないの。ぐふふふふ。

髓子 え? …へえ、好きなんだあ。

ケイ ほとんどクレージー。ドウフフフフ…。

りか (コーヒーの用意をして来る) なんなんだろ、あのコーヒーメーカー。パコパコ音がしちゃって。壊れたのかしらんねえ。

ケイ、マコロンを口に突っ込む。

宵子 あ、するよね、コーヒーメーカーって。ねえッ。

髓子 うん、パコパコ音する、普通。ねッ。

ケイ (マコロン口中) ほおほお「そうそう」の意) みぐがあく音よ「水が沸く音よ」の意)

りか 何言ってるんですか、先生。(コーヒーを出し) どうぞ。

髓子 ありがとー(ト、ミルクをドクドクいれる)

りか あなたねーッ。

宵子 あ、ほら、刺激物はよくないから。あたしはブラックが好き。

ケイ あたしもいつもブラック。

りか 先生・・・？

コーヒーを飲む三人。

皆なをじろりと見ながら、コーヒーを飲むりか。

りか で・・・。

三人 ？

りか 宵子さんとやら。

宵子 はい。

りか あなた、春野疾風と、ここで逢引きのお約束とか？

宵子 逢引きなんて、そんなあ。

髓子 そうよ。ブタやギユウじゃあるまいし。

ケイ あ、それってりかさんの発想。

髓子 え？そうなの。

ケイ マジで言うの。

宵子 ジョークじゃなく？

ケイ マジ。よね？りかさん。

りか は？（意味がわからない）

三人 あはははは。

りか え・・・あ・・・（むりやり、笑いを作る）

髓子 頭、悪いんだあ。

りか あんたに言われたくないッ。

ケイ わかったわかった。もうからかわない。

髓子 仲間に入れちやる。

りか あ、あんたにッ・

髓子 疾風の話聞かせてよ。ここで会う約束だったって？

宵子 そう・・なんですけど・・。

宵子をじつと見る三人。

宵子 (妙にてれて) やだあ、皆さんだって、疾風のこと、知ってらっしやるくせにいい。

三人 知ってるわよ。

宵子 でしょ。だったら、なにもあたしがわざわざ。

髓子 でも、約束なんかしてない。

りか・ケイ (うなづく)

宵子 ・・手紙が来たのよ。9月23日に烏賊浜に来ませんでした。

三人 それは聞いた。

宵子 あの日も・・三の付く日だったのよ・・あんず飴・・やきそば・・イカのポツポ焼き・・あーん、膝枕なんて恥ずかしい。

りか 何言ってるの？

髓子 ちゃんと最初っから話してよ。

ケイ いつのことなの？

宵子 ことしの春、三月二十三日。三の付く日、烏賊浜のお縁日。

髓子 それでイカのポツポ焼き？

宵子 そう。美味しかった。でも今夜は夜店は無理ね、このお天気ですもの。

りか わざわざそんなもん食べに東京からここまで来たの、あんた。

宵子 埼玉だけ・・。わざわざ来たんじゃないわ。アレックスのお墓参りに。

ケイ アレックス？

宵子 あたしが育てた警察犬よ。

ケイ あなた、警察犬の訓練士なの？

宵子 そう。

髓子 かつこいいい。

宵子 そーお？そーでもないわよお。

髓子 ううん、かつこいいいよお。

宵子 ふふ。ほんとは、ちょっとはかつこいいいかなって自分でもおもってるの。け

どけど人から言われるとてれちゃう。あたし、てれやさんよ。だからあ、あ

ん

まりイジらないでね。うふふ。あ、恥ずかしいッ。

ケイ ……へんなやつ…。

りか で、どうしたのよ、そのパテックスが。

髓子 わざと間違えないの。

りか ふん。

宵子 優秀な犬だったのよ。飼い主は、埼玉県警の刑事さんなんだけど、刑事さん

よかアレックスの方がずっと優秀で、いっぱいお手柄もあって。でもね、

アレックスは死んだの。悲しかったわ。お墓がね、烏賊浜の延正寺ペット霊

園にあるって聞いて、この春、あたし、お参りにきたのよ。

ケイ その時…疾風に会ったって言うの？

宵子 そうなの。お墓参りしてから、烏賊浜の駅まできたら、縁日で、夜店が出て

て…。なんてこともなく眺めながら暫くぶらぶらしてたわ。そしたら…。

髓子 ナンパされたんだ。そうでしょ。

宵子 簡単に言うतそうだけど、簡単には言いたくないの。

りか 案外、頑固ものね。

宵子 だって、疾風は言ったのよ。“ヤキノバを食べませんか？よかったらイカのポッポ焼きもご馳走しますよ”・・・こんなナンパの仕方なんてあるうッ。

あー、恥ずかしい。

ケイ (呟く)・・・わけわかんない奴だわ・・・

りか 典型的なナンパじゃないの。うちの田舎じゃ皆なそうだわ。イモ煮大会サあるから、寄ってっけてける。今年のココヤシさ、スンベスンベで、りかちゃんほっぺたみたいだんべ。

髓子 いったい、それ、どこの田舎？イモとココヤシが一緒に穫れるところなんかある？

ケイ きつとトンガよ。で？

宵子 疾風は言うの。ペット霊園にいらしたでしょう？誰かを待ってたんですか？待ってた？誰か待って墓場うろついてんのなんてお化けだわよ。そうじゃなかったら、できたての骨でもねらってるカルシウム欠乏症の泥棒ね。

髓子 りかさんて悪食なの？どうりで、今夜のオカズへんなものばかり・・・

ケイ でッ？

宵子 霊園から、あたしの後をつけてたわけ？って思ったわ。どうして？なんであたしの後を？全然、気付かなかった。だって、ペット霊園に行ったのは昼間よ。今はもう夜・・・そんな長い時間、どうして、あたしなんかの後を・・・でも、そういうの、女はちよつと弱いわ。うふん。

りか そのッ、うふんてのやめなさいよッ。そんなのね、あんただけよ。あたしなら、さっさとつっぱねてやるわ。

宵子 不幸な女は、ついつい、そういう不幸な行動に出してしまうものなのよねえ。

りか なに？

髓子 ヤキソバとイカのポップ焼きを食べたかったのよ。そうでしょ。で、おごつてもらったの？ふたつとも？

宵子 ヤキソバもポップ焼きも口実じゃないのお。こどもね、髓子ちゃん。

りか 髓子ちゃん？いつの間にそんな仲よくなったのよ、あんたら。ねえ、先生。  
ケイ それから、疾風はどうしたの？宵子ちゃん。

りか 先生ッ。

宵子 あたしたちは渚を歩いたわ。あたしは話したわ、アレックスのこと、あたしが育てた警察犬・アレックス・V・d・ヘルマンシユロイゼ！今世紀最高の訓練ジージャー！

髓子 ねえ、警察犬の訓練士ってむずかしいの？

宵子 うーん、そうねえ。訓練技術のみに秀でていても、管理技術だけでもだめね。心技体ともに磨かれた者こそが、職業訓練士の理想よ。

髓子 へえ、心技体。おすもうさんみたいね。しこ名はあるの？

ケイ あるわけないでしょッ。

宵子 相手はもの言わぬ犬なのだから、そのすぐれた天性の性能を最高度に引き出してやるのが一番大切なのよ。その点、アレックス・V・d・ヘルマンシユロイゼは、すばらしい犬だったわ。服従訓練は、たった一日でマスターした。

髓子 へえ。ねえ、おスワリとかお手とかやるの？

宵子 座敷犬じゃないのよ。(得意になってきて)アレックスッ、スワレ・・・フセ・・・マテ・・・(離れて)ヨーシ、コイツ・・・(撫でて)グードッ。こんな感じかなあ。

髓子 かつこいいい！

宵子 (ますます得意になって)アレックスは生後六カ月で、日本警察犬協会、選

別基本訓練試験のA-1からCまでを満点でクリアしたのよ。あれほど優秀な成績を、それもわずか生後六カ月で修めた犬は歴史的に見ても稀で、かつて名犬とうたわれ、一九六五年の捜査チャンピオンとなったアドルフ・V・ブリテイヒューゲルでさえ満点はとれなかった。あたしのアレックス・V・d・ヘルマンシュロイゼは、オールド・V・d・ヘルマンシュロイゼの血統を

ちよくし

継ぐ直子で、小型ながら、堅固な体質と生気に満ちた表情、能動的な動きが素晴らしく・・

ケイ 誰か止めなさいよ。

りか あんたがカッコいいなんて言うからよ。

ケイ で、死んだのねッそのワンコロはッ。

宵子 ワンコロ・・（我にかえって）あ・・こ、こんな話、きっと疾風には、全然つまらなかったわね。

ケイ あんまり興味ある人いないとおもうわ。

宵子 でも、でもね、彼は、一生懸命聞いてくれた・・ううん、一生懸命って言うより・・あたしの一言一句を、確かめるみたいに、かみしめるみたいに・・。でも、その目がとても悲しそうなの。不思議な目だった・・。気がついたらあたしは疾風を抱いていて、疾風はあたしの膝の上に頭と手を・・こんなふうのせて・・眠ってたわ。

髓子 ・・・犬みたいな人ね。

宵子 そう・・疾風のあの目・・なんだかアレックスに似てた・・。

ケイ で、疾風とはそれつきり？

宵子 そう。

髓子 それが、突然、手紙が来た・・。

宵子 そうなの。

ケイ・髓子 ふうん……。

りか でも、それで安心した。そいつは、あたしの疾風とは違うわ。

三人 え……？

髓子 あたしの疾風って……。

りか 去年の九月・・ちようど今夜みたいに雨と風の激しい夜だったわ。店に来たのよ、春野疾風が。

ケイ ちよつと待ってよ、りかさん。そんな話、あたし、一度も聞いたことないわ。

あなた、今年の春、あたしと会った時、お店はつぶれたって。

りか ええ、そうですね。去年の九月に閉めました。店は閉めたって、後片付けとかいろいろあるじゃないですか。あの夜も・・もう大方片づいて、あたしはがらんとした店でひとり、タカラ缶チューハイを飲んでたんです。

髓子 そこへ……疾風が……来た……の？

りか 気がついたらドアのところに立ってた。誰かを待ってるんですか？……そう言ったわ。

宵子 あら？

りか そう。ここんどこだけは、あんたの疾風とお揃いだわね。だから、あたしは言ってやったの。誰か待ちながら、タカラ缶チューハイ飲んでる女なんて、ただのアル中よ。かかわない方がいいわよってね。

宵子 どうして、そういうかわいくないことばかり言うのよ。

りか だって、ドアのうすくらがりで、いきなり、そんなキザなこと言うやつなんてろくなもんじゃなくもおもったのよ。ところがさ、店の中に入ってきた疾風を見たら、これがいい男じゃないの。そういう時って、ふっと間ができちゃうのよね、女には。

髓子 ふいを突かれたってやつね。

りか それぞれ。

宵子 なんだ、りかさんだつてあるんじゃない、女の弱み。

りか あんたのとは違うわよ。あたしは、あんたみたいに、後つけられて喜んだり  
はしないの。あたしは、瞬間を大切にするタイプの女なのよ。

宵子 ふん。ようするに一目惚れしちゃったんでしょ。

りか そりゃするわよ。だってあんた、疾風ったら、あたしの理想にぴったりなの、  
ううん、それ以上の男だったんですもの。そんな男が、嵐の中、突然、現れ  
てごらん。

ケイ ずいぶん・・・ドラマチックね・・・。

りか そうなんですよ、先生。疾風はね、カウンターの、あたしの横に座って、誰  
かを恨んでいるのって聞いたんです。

髓子 世間を恨んでた、でしょ？

宵子 お店を閉めなきゃならなかったんですものね。

髓子 世間に負けた女。

宵子 昭和枯れすすきね。

りか なにもかも恨んでるわって言っやったわ。そしたら、疾風は、ポケットから  
へんてこな人形を出すと、これはグードゥー人形と言って・・・

ケイ グードゥー人形?!

りか ええ。なんでも、西インド諸島のとある島に古くから伝わるグードゥー教の  
守り神とかで・・・その人形に呪いをかけると、呪いをかけた相手を不幸に  
することができるんですって。

宵子 ちよつと、それって・・・。

ケイ (止めて) 疾風が・・・春野疾風と名乗る男が、そう言ったのね？

りか　そうです。そして、こう両手をあげてカッカカカと高笑いをした。

髓子　あたし、その人、ぜったい好きにならないと思う。どんなにいい男でも。

宵子　そうよね。そうとう不気味じゃないの、その男。

りか　悪魔的な魅力と言つてほしいわ。

ケイ　で、りかさんは、呪いをかけたの？

りか　ええ。せつかくですから。

宵子　誰に？

りか　亀田。

ケイ　え？・・・ああ、例の不動産屋さん？

りか　そうです。

宵子　誰なの、その人。

ケイ　りかさんのお店の常連だった人らしいんだけど、ツケを踏み倒したんですつて。

りか　それだけじゃありませんよ、先生。亀田に紹介されたサラ金から借金したせいで、あたし、首がまわらなくなっちゃつて、あげく、店を手放すハメになつたんですよ。

髓子　それで、その人に呪いをかけたわけね。

りか　そう。

髓子　効いた？

りか　ばつちり。

髓子　ホ、ホント?!

りか　一週間もたたないうちに、息子はコエダメに落っこちて骨折、女房はホストにいれあげて家に帰つてこない、あげく本人は糖尿をわずらつたつていう風の噂が届いたわ。

髓子 やったわねッ。

りか やったわよッ。

宵子 効くんだけ、そういうのってほんとに。

ケイ それで・・・疾風とは、その後、どうなったのよ。

りか もちろん離しやしませんわッ。

髓子 へえ、やるわね。

りか まあね。あたしたちは、とても気があったの。そして、すぐに二人で一緒に商売をやるうって話になったわ。ああ、もちろん、それはベッドの後での話よ。

髓子 ぐふふふ。

りか ヴードゥー人形を大量に作って売ろうってことになったのよ。

宵子 西インドまで買いつけに行ったの？

りか まさか。隣り町の瀬戸物工場に忍び込んで、土瓶をかつぱらってきたのよ。

宵子 土瓶？

りか 形がヴードゥー人形と一緒になの（ト、土瓶のポーズ）

宵子 それって泥棒・・・

りか まあね。でも仕方ないわ。土瓶すら仕入れるお金がなかったんだもの。

髓子 さすが、驚粕りかさねね。詐欺かスリか・・・

りか え？サギ？

宵子 あらホントだ。サギカスリか。やだあ、髓子ちゃんって、そーゆーの気づくのうまいい。口だけえーとか。

ケイ なに？それ。

りか なんでもありませんわ、先生。くだらない言葉遊びです・・・（つぶやく）

自分の名前にそんな秘密があったなんて、今の今までも気付かなかつ

た・・・。

宵子 でも・・・ねえ、ケイ先生。この話って・・・。

ケイ ええ。あたしの春野疾風シリーズの『ヴードゥー人形の呪い』にそっくり。

宵子 ですよね。

りか 先生が春野疾風って名前の男が出てくる小説を書いたなんて、あたし、今日初めて知りました。

ケイ 勉強不足なんじゃないの？秘書として。

りか は・・・でも・・・でも、偶然ですねえ。

ケイ 偶然のわけないでしょ・・・。

りか え？

ケイ よく考えてみてよ。いい？りかさん。あなたの話の春野疾風があなたのところに現れたのは、去年の九月。あたしの小説が出たすぐあとよ。

宵子 そうだわ・・・。

髓子 ということは・・・

ケイ たぶん、その男は、あたしの小説の主人公を名のって、つまり偽名をつかったのよ。

りか 偽名？

宵子 でも、なんでそんなことを？

髓子 ファンだったんじゃない？ケイ先生の。

ケイ あたしの小説の主人公の春野疾風は、とても美しい男なのよ。ずうずうしいわねえ、その男。

髓子 ねえ、ケイ先生。春野疾風にはモデルがあるんですか？

ケイ まあね。

髓子 誰？

ケイ 誰だっていいじゃない。

髓子 教えて。

ケイ いや。

宵子 どうして？

ケイ どうしても。

りか 知りたいわ、先生。

ケイ やだ。

髓子 なんで？

ケイ 笑うから。

宵子 笑いません。

ケイ ……笑うよ。

三人 笑いませーん。

ケイ ……ほんとに？

三人 ほんとに。

ケイ ぜったい？

三人 ぜったい。

ケイ ……キーチ……。

三人 え……？きいちって……

りか ぬりえのお？

(同時に) 宵子 宮沢？

髓子 橋幸夫に似てる？

ケイ なに?!

りか (宵子に) 宮沢喜一ってこたあないでしょ。宮沢は。

宵子 (口々に) (髓子に) 誰に似てるって？

髓子 (りかに) きいちのぬりえ書いた人の顔しってるのお？

ケイ …… 橋幸夫に… 似てるって言ったのだけ？

髓子 あたしだけど。

ケイ 一生許さない。

ケイ、窓のそばへ行き、ブルーになり

窓ガラスに“貴一”と書く。

三人 中井…？

りか あたしの疾風は、中井貴一なんかじゃないわ。あんなおでこにしわがよった  
(宵子に口を抑えられる)

宵子 そ、それより、問題は『ヴードゥー人形の呪い』の真似して、りかさんに近づいた男。贋ものの春野疾風。そうよね、ケイ先生。

髓子 あのお…それってどういうストーリーなの？

宵子 春野疾風が、海辺のさびれた町で、アル中の女に出会い、ちよつとなくさめてあげたら、その女に、しつこくからまれちゃうの。仕方なく疾風は、自動販売機で、タカラ缶チューハイを買って、その女に与えると、その女がそれを呪いの人形と勘違いしてしまうという話…ですよね、先生。

ケイ ところが、その女には妙な霊の力があって、以後、女は、自動販売機を壊してはタカラ缶チューハイをかつぱらい、次々と、本当に、呪いのヴードゥー人形に変えては、売りまくるの。

髓子 ずいぶん無茶な話をお書きになるんですね、ケイ先生って。

ケイ 流行作家なんてそんなもんよ。

りか あたしは、タカラ缶チューハイをブードゥー人形にかえたりはしないわ。ちやんと土瓶を・・・

髓子 かつぱらってきたのは同じだわ。

宵子 疾風は、恐ろしくなって、その女から離れようとするんだけど、とにかくその女は霊力を持つてるから、逃れられないの。やがて、疾風が自分から逃げようとしていることに気づいた女は・・・

りか 疾風を殺す・・・。

三人 え・・・。

宵子 りかさん・・・あなた、まさか・・・。

### 風音・・・

りか ……部屋中、土瓶だらけだったわ。あたしは、朝から晩まで色を塗って、

ブードゥー人形を作った。それをね、疾風が隣り町のステーションビルにある占いグッズを売ってる店に持っていくの。売れたのよブードゥー人形は。

土瓶だって、もう瀬戸物工場からかつぱらってくるのはやめることにして、ちやんと仕入れられるようにまでなったの。あたしは、もう一度、店を持つ夢を持ち始めたわ。今度は“カラオケスナック・りかちゃん”じゃなくて、

“占いスナック・りかちゃん”にしようってことも、疾風と相談したりしてたの。それなのに、疾風は・・・隣り町の“スナック・バービーさん”のママと浮気して・・・あたしがどんなにくやしかったかわかる？だって、疾風はあたしの、夢そのまんまの男だったのよ。そんな男と出会っちゃって、それも、人生で一番最低だった時に、その男に助けられちゃって・・・ひきかえせないわよ。あきらめられないわよ。よその女のものになるくらいだったら

殺っちゃおうっておもったの。十二月の寒い夜だった。疾風にタカラ缶チュ  
ーハイをいっぱい飲ませて、疾風は寝ちゃったので、アパートに火をつけた  
の。それから、外に飛び出したわ。もう、夜があげてたわ。すっごく寒かつ  
た。アパートを出たところで、あたし、すべって転んじやった。頭、ガンッ  
て打って、痛アっておもって、そしたら急に悲しくなったのを覚えてる。も  
う・・・これで疾風とさよならなんだって。わんわん泣いたわ。気が遠くなる  
くらいわんわん泣いた・・・。翌日、アパートに来てみたら、なにかもま  
る焦げになっていたわ・・・。

ケイ  
そういえば・・・そんな事件、あったような気がする。こっちの新聞で、読  
んだような気がするわ・・・。

りか  
先生、あたしに自首しろなんて言わないでくださいね。

ケイ  
そんなこと、言っこないじゃない。だって・・・まるで、あたしの小説をま  
ねっこしたみたいな・・・そんな男を、あなたが殺したって、そんなのあた  
しには、なんの関係もないこと・・・。

宵子  
でも・・・その、春野疾風って人、いったい、何者なんだろう。いくら、ケイ  
先生の小説のファンだからって、なにもそこまで真似しなくたって。

りか  
あんたの疾風は？あんたの疾風は、ケイ先生の小説のまねっこじゃないの？  
さあ・・・それはわからないけど。でも、彼が春野疾風って名乗った時、あた  
し、吹き出しちゃった。あたしは彼に言ったわ。それは、朽田ケイの小説の  
主人公の名前でしょって。そしたら、疾風はムキになって、僕はほんとうに  
春野疾風という名前なんだっていうの。本人がどうしてもそうしたいんなら  
それでいいわってあたしはおもった。

ケイ  
縁日で、警察犬訓練士をナンパする話なんて、あたしの小説にはないわ。

宵子  
でしょう。だから、あたしの疾風と、りかさんの疾風は別人。烏賊浜には、

ケイ先生の小説のファンが多いのね。

りか　ねえ、髓子さんも・・・春野疾風を知ってるんじゃないの？

ケイ　え？

髓子　うん・・・まあね。でも、あたしの疾風も、りかさんや宵子さんの疾風とは別人。

りか　先生の人気もたいしたものだわあ。

髓子　あたしは、春野疾風シリーズは読んだことないけど・・・きっと、あたしの疾風も、先生の小説を真似したのね。実はね、この子、疾風の子なんだ。

三人　ええ?!

りか　だって、あんた、小泉正太の奥さんだって。

髓子　そうよ。

りか　あんた、夫がいるのに他の男の子を身籠もったの？

髓子　そう。

宵子　ご主人は知ってる？

髓子　知らない・・・とおもう。

りか　（呟く）・・・チクッてやりたい・・・。

髓子　あたしね、正ちゃんとは、ずいぶん前から一緒に暮らしてたの。子供はまだ作るのよそうねって二人できめてもいたのね。ところが、去年のクリスマス・・・。

ケイ　春野疾風と名乗る男が、あなたのところに見れたのね。

髓子　そう・・・。あ、ちょうど、今夜みたいに雨と風がすごい夜だったわ。

ふと、窓の方を見る宵子　りか　ケイ・・・。

髓子 あたし、正ちゃんを待ちながら、おこたでうたたねしてたの。正ちゃん、お仕事がホストだから、夜、遅いのよ。クリスマスだったからよけいにね。

りか へっえー、かわいそうねえ、クリスマスの夜だったのにひとり寝？ホストの女房になんかなるもんじやないわねえ。

宵子 りかさん、そういう、強がりみたいな意地悪みたいなの、およしなさいな。

ケイ それで、どうしたの？

髓子 おこたの、あたしの横に疾風が来たの。そうして、言ったわ。誰かを待っているの？って……。

宵子 また？それって、あたしと会った時も、りかさんと会った時にも、疾風が言ったセリフじゃない？

髓子 だっけ？

宵子 そうよ。

りか で、あんたはなんて答えたのよ。

髓子 正ちゃんって……。正ちゃんを待ってるのよって、ちゃんと言ったわ。

ケイ そしたら、疾風はなんと言ったの？

髓子 ふうんって。そいで、どっか行っちゃった。

りか なによ、それ。夢でもみてたんじやないの、あんた。

髓子 そんなことないよ。だって、次の日の夜、疾風は、また現れたの。今度は、包帯で体中ぐるぐる巻きにして。

三人 ええに

ケイ ……『春野疾風シリーズ3・透明人間消えます消えます』だ。

りか な？なんですか？先生。

ケイ シリーズ三作目の題名よ……。

りか・宵子 えーッ。

髓子 透明人間？・・・(ハツとして)やだ、かわいそう、疾風！

りか 何言ってるのよ、この子ッ。

髓子 ケイ先生、それ、あたしが言ったの。あたしが疾風に言ったの。最初の晩、疾風がおきたにぐりぐり入って来た時、あたし、言ったの。正ちゃんなの？お仕事、もう終わったのお？それとも透明人間にでもなって、あたしのここに来てくれたのお？だったら、ズッコはすっげえ嬉しいぞー。

りか なにそれッ。あー、やだやだやだ。

宵子 どうして、そういう軽薄な口がきけるのよッ。

りか そうよッ。

ケイ でもそうなの。そういう話なのよ、あれは。三作目は、若者に媚びて、軽薄な話を書いたの。編集がそうしろって言ったのよ・・・女の子、ひっかけ

宵子 ようとして、疾風が、その女の子のいいなりに変身しちゃう話・・・。髓子ちゃん、それ、あなたのせいじゃない。あたしが、そういう話を書いたのよッ。

宵子 落ち着いてください、先生ッ。

りか 先生のせいなんかじゃないわ。また、誰かが、たぶん先生のファンが、春野疾風を名乗って、先生の小説を真似て悪さをしたんです。

ケイ だって、透明人間よ。並みの男がなれないわよ、そんなもん。

宵子 じゃ、髓子ちゃんのところに残れたのは、先生の小説の中の春野疾風だって言うんですか？そしたら、りかさんの疾風だって・・・

りか そんなことあるわけじゃないの。あたしは疾風を殺したのよ。あたしがあいつを殺したのは、去年のクリスマスの前よ。もし、あたしたちの疾風が同じ男だったら、どうして、この子のところに、死んだはずの疾風が現れるのよ。

髓子 疾風・・・姿は見えなかったけど・・・でも、声はちゃんと聞こえたよ。

りか あたしの疾風は、姿も形も、もちろん、声だつてちゃんとあつたわッ。

ケイ わかつたわよ……。疾風はひとりじゃない。少なくとも今のところは……  
何人だ？

三人 三人です。

宵子 髓子ちゃんの話の、先を聞きたいわ。

髓子 クリスマスの次の夜、包帯ぐるぐる巻きの疾風が現れたところまで話したんですしたよね。

りか そうよ。

髓子 どうしたの？とあたしは聞きました。僕をずっと待ってた？と疾風は言うの。そう言われるとそうかもしれないとあたしはおもつたわ。あたしは、正ちゃんをととても好きで、だから、あたしは、正ちゃんの好きなものを毎晩作って、たとえば、キンピラとか肉ジャガとか……。あたしね、そういうもの、小さい時から食べたことなかったの。いわゆる手料理って……。笑っちゃうけど、手料理って、手の料理のことだとおもつたの。ほら、熊の手とかを食べるのあるでしょ。そういうやつのことだと。

りか 熊の手を食べるの？

ケイ あるのよッ中華料理で。今度、食べさせてあげるわよッ。

りか 是非。

髓子 やっぱり、りかさんて悪食ねえ。

ケイ (髓子に) それでッ？

髓子 正ちゃん、毎晩、とても遅いの。だから、あたしはひとりの時間がとても長い。ボーイフレンドとか欲しいなんておもっちゃったりしたけど、そんな勇気も魅力もあたしには、ないの。でも、淋しいことは淋しいのよやっぱり。そういう時に、疾風は来たの。だから、あたし、疾風に、僕を待ってたの？

って聞かれた時、思わず、うんツて答えちゃった……。もし……。って、あたし、おもう。疾風がね、とつてもステキな男の子だったら……。疾風の姿が目に見えて、それが、めっちゃ、あたし好みだったら……。あたし、最初に疾風がおこたの横に来た時、痴漢ツて騒いじやったとおもう。

りか 好みの男だったらいいじゃないのよ、痴漢だつてなんだつて。

髓子 りかさんにはわかんないのよ。りかさんおばさんだもの。おばさんだから、好みの男に、すぐ、ウヒョウヒョしちゃうのよ。

りか にくつたらしい言い方するわね、あんたつて。

髓子 あたしは、ステキな男の子には必要以上に警戒しちゃうの。夢中になっちゃったら捨てられるって思い込んでるのよ。そういうクセがついてるの。だから、正ちゃんと結婚できたの。正ちゃんブスだし、ぜんぜん男を感じないから結婚できたの。

宵子 めちやくちやな言われ方してるわね、その正ちゃんて人。

りか あんた、そんなんで、人生つまらなくない？

髓子 つまらなくつたつて仕方ないわ。あたしはそうなんですもの。でもね、あたしの疾風は姿がなかった。ただ、感触と心と声……。それだけがあった……。あなたの都合のいいように……。疾風は、あなたの目の前に現れたつてわけなのね……。

髓子 たぶん、そう……。

宵子 ねえ、どうしたつて理解できないわ。髓子ちゃんの疾風は姿が見えないんでしょう。それつて、髓子ちゃんの、ただの妄想つていうか……。

りか あたしもそうおもうわよ。けど、そしたらこの子のお腹はどうなつてんのよ。

宵子 だから、ホントは、ダンナの子なのに……。

りか あー、よくあるわね。自分のお腹の子が、誰の子だかわかんないつてヤツ。

軽い女によくあるパターン。

ケイ どうして疾風の子だってわかったの？

髓子 疾風がそう言ったからよ。正ちゃんがない時、あたしたちは、やった。

三人 ……。

宵子 ころら。

りか 露骨な言い方ッ。ねえッ、せんせ。

ケイ 契ったと言いなさい。

りか え？ちぎった？なにを？紙でもちぎるんですか、せんせ・・・まあ、アノコトを、そんなふうにいう言い方があったなんて。先生とご一緒させていただくと、ホント、勉強になります（頭を下げる）

ケイ （イライラして）いつの話なのッ、それは。

髓子 クリスマスから三日目。

りか 暮れの忙しい時に?!

髓子 そう。世間さまが大忙しの夕方、あたしと疾風は・・・（紙をちぎる仕種）

ちぎった・・・？

りか あっきれたッ。そんな暇があったら障子紙の張り替えでもしなさいよ。ねー、

先生。

宵子 だけど、あれでしょ。あなたの疾風は透明人間なんでしょ（りかに）ねえ、

そうよね。

りか 悪いけど、あたし、この子の話、ついてけないわ。

ケイ 感触で・・・そうと・・・わかったのよね？

髓子 そうッ。その通りよ。

宵子 ……ケイ先生は、ついてってるみたい。

ケイ まかせて。

髓子 やって・・・ちぎってから一週間目。お正月の三日。正ちゃんは、寝正月。あたしが、お風呂の掃除をしているところに、疾風が来たわ。そして、言ったの。“ズッコちゃんをさらっっちゃおかな”

りか うわあッ聞きましたあッせんせッ。もおもおッ、あつきれケロケロケロッピだわよッ。

髓子 あたしさー、すっごく嬉しかったんだ、ホントは。でもね、これはやばいっ  
ておもったの。できれば、疾風とは、今のまんまでいたいとおもってたから。

りか うわあッまたまたこれだッ、驚きモモのキ万国ビックリショウだわよッ。

ケイ うるさいッやかましいッうっとうしいッ。

りか すいません・・・ポアしてください。

宵子 質問していい？

髓子 どうぞ。

宵子 今のままでいたって、透明人間と、姿が見えないまんまで、その、つまり  
感触？だけでつきあっていたってこと？

髓子 そうよ。

宵子 ？・・・(りかに) あたしもおりるわ、この話。

りか あ、あたしも質問していい？

髓子 どうぞ。

りか お正月の三日にどうしてお風呂掃除なんてするのよ。それは、正太さんとの  
姫はじめをすませた後の話なの？

髓子 お風呂掃除は好きだからいつでもやるの。姫はじめってなに？

りか ……。(宵子に) よかったでしょう、おりて。この話。

ケイ (呟く) “ズッコちゃんをさらっっちゃおうかなー”・・・そう言ったのね、疾

風は・・・。

髓子 そう。うーんって迷ってるあたしに、疾風はびっくりおったまげのことを言うのよ。聞いてくれてる、ケイ先生。

ケイ あたしは聞いてるわよ。

髓子 ズッコちゃんは、お腹の子ども、僕の子だっておもってくれたことはないの？  
ケイ え？・・・ふうん・・・なるほど。

髓子 やや！？あたしって妊娠したのか、ヤンヤヤンヤとあたしはおもいました。

ケイ ……。わかるわ。

宵子 すっごく、無理してない？ケイ先生。

りか たぶん。

髓子 そしてね、その時、あたし、初めてわかったの。あたし、ホントは赤ちゃんがすごくほしかったんだって。しあわせ・・・みたいなあったかいものが、このへん（胸）にぞわっておしよせてきた・・・。赤ちゃんができた。疾風の疾風とあたしの赤ちゃんができた・・・。あたし、なんだか涙が出そうになっちゃって、照れ臭くなっちゃって・・・。あたし、疾風の頭・・・って言うっても包帯ぐるぐるの頭だけど、ぺちんってぶつたの。疾風、ビクッてした・・・。でも、その感触が違ったの。いつもと・・・なんにもなかった疾風の感触と違ったの。そこに・・・疾風の頭があったの・・・。透明人間のはずだったのに・・・。頭も体もないはずなのに。

ケイ 真実の愛を得た時、すべての怪物は、本当の人間になれるのよ・・・。

風音 ……。

宵子 それ・・・『美女と野獣』のパクリじゃありません？

ケイ （平然と）ラブストーリーの定番じゃないの。

りか やだ、先生。急にわけわかんないこと言って。

ケイ わかんないのは、あんただけよッ。

宵子 ラブストーリーの定番か。なるほどね・・・え？じゃ、この話・・・やっぱり、先生が書いた？

ケイ 作家だったら、誰でも一度は使うテよ。バリエーションかまして。

髓子 あたしの手は、そのまんま、ずるずるって疾風の首筋まで・・・包帯ぐるぐる巻きの首までおりてった。

ケイ ここからが、いいシーンなのよ。

宵子 想像すると不気味だけど・・・。

りか BGMかけましょうか、先生。

ケイ お願い。

音楽。

髓子 疾風は言いました。 You love me ?

ケイ 愛してるか？

髓子 I love you

ケイ 愛してるわ。

りか (宵子に) ちよいと、いつから毛唐の話になったの？

宵子 知らないわ。読んでないもの、この話。

髓子 You trust me ?

ケイ ついてくるか？

髓子 I trust you

ケイ ついていくわ。

宵子 ちよつとお。『ブレードランナー』のラストシーンじゃないのお？

ケイ そして、あなたは、ハリソン・フォードの首を締めた。

宵子 え？

りか ハリソンなに？（宵子に）いつ出てきたのよ、そんなやつ。

宵子 首を締めたって・・・なぜ？なぜよ？

ケイ 人間になった疾風を見るのが怖かったから。今の生活から抜け出したいくせに、それが現実になりそうになると、とたんに尻ごみしてしまう。そんなみじめな自分を見たくなかったから・・・だから、あなたは、疾風の首を・・・締めた・・・。

髓子 ええ・・・でも、どうして知ってるの？ケイ先生。

ケイ ...あなたが・・・書いた小説だから・・・。

宵子 ...ほんとうに？・・・ほんとうなの？ケイ先生・・・。

髓子 あたしは・・・強く強く締めたわ・・・お腹に力を入れて。腹筋は強かった。あたし、陸上部だったから。うんとうんと締めた。締めてるうちに、お腹がじいんとしてきた。こんなにキ入れたら、赤ちゃんに染みちやうわ・・・。そうおもった。赤ちゃんに・・・あたしと疾風の赤ちゃんに・・・。そのうち、手の感触が急に軽くなったの。疾風・・・と、あたしは呼んでみたの。でも、答えはなかったわ。疾風の姿もなかった・・・風の音がただけ・・・。

風音・・・。

髓子 あたしは、またお風呂掃除に戻りました。

りか これって、お風呂場のシーンだったの？

宵子 らしいわね・・・。

ケイ ……かわいい赤ちゃんを産もうね、髓子ちゃん……（立ち上がり、煙草に火をつけようとして……やめる）

宵子 それつきり、疾風は現れなかったの？

髓子 ええ。

りか それにしても、正太さんは、いい面の皮だわね。

宵子 ご主人には、なんて言ってたの？

髓子 なんてって？

宵子 だって、あなたたち、子供は暫くは作らないってきめてたんでしょ？

髓子 そうなの。あたし、実は悩んだの、正ちゃんになんて言おうって。お風呂洗いなながら、いつもそのことばかり悩んでたわ。

りか あんたのやること、どうしたって、あたしには理解できない。なんで、お風呂洗いなながら悩むのよッ。

髓子 でもそうなんですもの。正ちゃん、疲れて帰ってくるんだから、きれいなお風呂に入らせてあげたいわ。ピカピカの湯船につからせてあげたいわ。でも彼をごまかすことは、もう、あたしにはできないわ。

りか 最初っからごまかせないわよ、こんなむちやな話ッ。

髓子 お風呂は一生懸命みがくときれいになるわあ。

りか お風呂掃除の話をしてるんじゃないのよッ。わかってんの、あんたッ。

ケイ いいわ。もういいわよ、髓子ちゃん。

りか なにがいいんです？先生。

ケイ だって、あたしは知ってる……この先を……あたしは、知ってるから……。

髓子 ケイ先生……。

りか 先生。先生の小説にケチつけるようで新宿ですけど。

ケイ え？

りか あら？原宿？御宿？天竺？

宵子 恐縮！

りか そう、それですけど。こんな女は許しちゃおけませんわ。そりや、あたしは正太さんとは、なんの縁もゆかりもございません。だけどこの女のやってることはめっちゃくちゃですよ。こんなことされちゃ、男はたちません。そうじやないですか、先生？

ケイ ……りかさん。

りか こーんな女を許したら、いったい、世の中にどうして、男と女ってもんがあるのか、神様がどうして男と女を作られたのか…ひとりの男、ひとりの女って決めて、嫌でもなんでも、どんなにウンザリしてもつれそって……そういうことが、いつさいがっさい、ダイナシになりやしませんか？

髓子 正ちゃんは泣いてたの。お風呂場で、正ちゃんは泣いてたの。それなのに、あたしは、そんな正ちゃんに、なんにもしてあげられなかったのッ。

りか いい気なことを言うんじゃないのッ。

ケイ りかさんッ。

りか 先生ッ、先生の前ですけど、あたし、がまんなりません。そりや、あたしはよくない女です。すっごくひどい女です。でもねえ、こーゆー、こーゆーことは…こんなことはしない女です。いったん決めた男に、惚れた男に、こんなことはしない女です！

髓子 うっ…。

ケイ 髓子ちゃん？!

髓子 い…いたッ…お腹が…痛ッ…。

宵子 う、産まれるの?!ま、まさかッ。

ケイ 髓子ちゃんッ、しっかりしてッ。

りか ほつときやいいじゃありませんかッ。

ケイ なに言うのッ、りかさんッ。

りか 先生ッ。

ケイ りかさん、あなただっておんなじ。あなただって自分の好きなようにしか、疾風を見なかった。愛している、惚れているってことだけを楯にして・・・。

宵子 ケイ先生・・・。

ケイ りかさん・・・あなた、夏でも冬でも、その毛糸の帽子脱がないわね。どうしてなの？考えたことある？

りか え？そんな・・・(宵子に)あたしのかっこへん？ねえ、これ(帽子)似合わない？へん？だったら脱ぎます。脱ぎますよ、先生(ト、脱ごうとするが脱げない)

ケイ あなたには、その帽子が脱げないわ。だって、あなたの頭には穴があいてるから。

宵子 なんですって?! (りかを見る)

ケイ りかさん、言ってあげるわ。あなた・・・生きちゃいないのよ・・・。

りか え・・・。

ケイ あなた、死んでるの。疾風に殺されたの。あなた、幽霊なのよ。

宵子 えッ!?

### 音楽

ケイ 思い出してみて、りかさん。あなたは、アパートに火をつけて飛び出した。

でも、あなたが、自分を殺そうとしてたことを、疾風は、とっくのとうに気づいていた。だから、凍った道が朝日で溶けないように、疾風は塩をまいてお

いたの。ガチガチに凍ったアパートの前で、あなたは転んだの。そして運悪く、アパートの階段の角に頭をぶつけて・・・あなたの頭には穴があいたの。中からは、ぐちゃぐちゃの脳味噌とびたしたの。疾風は、そんなあなたを見て・・・疾風は、自分がかぶっていた毛糸の帽子を、あなたの頭にかぶせたわ。そして、抱きしめた。自分を殺そうとした女だけど、疾風は抱きしめた。それから、疾風は、あなたを部屋にかかえて戻った。彼は、あなたを抱いたわ。あなたがつけた火の手が自分にまわる寸前まで・・・ぐちゃぐちゃのあなたの頭を抱いていた。そして、疾風は、あなたを残して・・・アパートを出た・・・。

宵子  
先生！

ケイ  
・・・それが、春野疾風シリーズ第二作目のラストシーンよ。

髓子  
ううッ！

りか  
あ・・・あたし・・・あたし・・・。お湯、沸かしてきますッ（上手ドアに去る）

髓子  
う・・・うーんッ。

宵子  
しっかりしてッ、髓子ちゃんッ。

ソファ、観客に背の方を向けられ、そこに髓子、横たえられ、出産の

姿勢。

ケイ  
髓子ちゃん。お風呂をピカピカにするのはよいこと。疾風は、あなたに、お

風呂の洗剤をプレゼントしたよね。世間に出てるお風呂洗剤のすべて。タイルのメジをきれいにするカビキラーも・・・。あなたがお風呂掃除が好きなのを疾風は知ってたから。でも、それが命とりになったわ。まぜちゃ駄目なのよ、髓子ちゃん。“まぜるな危険”の文字、あなたの目には入らなかったの？有毒ガスが発生しちゃった・・・。髓子ちゃん、正太さんが泣いていたの

はそのせいよ。お風呂場で死んでいるあなたを見たからなのよ・・・。

宵子  
ケイ先生・・・。

ケイ  
“・・・疾風は、女を残して、疾風は風呂場の小さな窓から消えた。風が吹いてきた。その風に身をまかせるようにして、疾風は消えていった”

宵子  
それが・・・春野疾風シリーズ三作目のラストシーンなんですわね・・・。

髓子の足の間から、シャボン玉が翔ぶ。

宵子  
?!・・・しゃぼんだま・・・。

髓子  
え？なんで？なんでシャボン玉あ・・・どうして、あたしの赤ちゃんシャボン玉？・・・疾風・・・疾風、ごめん・・・。

りか  
（お湯の入った洗面器を持って出てきて、？と、立ち止まり）先生・・・この子

も・・・この子も幽霊なんですか？

ケイ  
（眩く）・・・♪おーとこなんてシャボンだま・・・。

音楽、大きくなって・・・限りなく暗転に近い溶暗。

その溶暗の中で、三人の女たちは、髓子をいたわり起こし、再び、テーブルを囲む。

明かり入る。

髓子、妙にさっぱりしてしまったお腹を撫でている。

りか、靴下とお揃いの手袋をはめる。

髓子 手も・・・冷えるの？

りか (うなずいて) なんだか、体中が冷たいの。あなたは、大丈夫？よかったら

(ト、マフラーを渡す)

髓子 ありがとね(首にまく)

りか (宵子に) あなたも、なんか着る？

宵子 え？・・・あたしは・・・

髓子 宵子さんは、これ(幽霊)じゃないのよ、りかさん。

りか あ・・・そうだったわね。

溜め息をつくりかと髓子。

ケイ ミステリー作家としては、とつても貴重な経験をさせていただいてると言わ

なければならぬかもね・・・。

髓子 ケイ先生、宵子さん。・・・あたしたちのこと忘れないでくださいね。

宵子 え？

髓子 だって、死んじゃった人間は、生きてる人に覚えててもらえなきや、幽霊として生きてゆけない・・・そうでしょ？

りか え？そうなの？

髓子 そうよ。忘れられてるのに、ひょっこり出てくるのなんて、ただの・・・

りか ただの？

髓子 お化けよ。

りか やだわ。お化けにはなりたくないわ。

髓子 でしょ。

ケイ 人は死ぬと思いを残こすのよ。思いがいっぱい詰まると幽霊ができるの。あ

なたたちには思いがあるでしょう。だから、あなたたちは消えないわよ。

りか　そこんところがちよつと不安なんですよ、先生。

ケイ　え？

りか　だって、あたし、さつきまで、自分が死んでたって知らなかったでしょう。思いつて言われても、どこらへんあたりの思いを残したらいいのか。

ケイ　疾風を他の女にとられるくらいなら、殺すって、あなたそう言ったじゃないの。それがあなたの思いでしょう？

りか　いや、だって、先生。あの時は、まさか自分が死んでるなんて知らなかったもの。元気ありましたよ、あたしだって、あん時までは。でも・・・あたしって・・・頭打っちゃったでしょ。そのせいかわかんないけど・・・。先生ッ、どうせ死ぬなら、どうしてもとまともな死に方にしてくれなかったんですか？　まさか、あたしが書いた疾風が・・・小説の中の疾風が、現実でも殺人を犯すなんて・・・考えてもみなかったから・・・。

りか　世間さまはあたしのこと死んだって知ってたのに、肝心のあたしが知らなかったなんて、あまりにも大ボケでしょう？　いくらあたしでもおちこむわ。

髓子　そう。赤ちゃんがいるって信じてたのに、しゃぼん玉だったなんて・・・。こんな目にあっておちこまない女っていないとおもう・・・。

りか　だから、先生。頼って申し訳ないんですけど、あたしたちが、幽霊の自覚をもてるまで、あたしたちの面倒みてくださいね。

ケイ　やっぱり・・・あたしの責任？

髓子　だって他には・・・

宵子　あたしは忘れないわ、りかさんと髓子ちゃんのこと。

髓子　ありがとう、宵子さん。

りか　なんだか申し訳ないみたいだけど・・・。

宵子 そんなことないわ。

髓子 精進しますから。早く幽霊としての自覚を持てるように。ね、りかさん。

りか、くしやみをする。

髓子 りかさん、まだ寒いのか？

りか (頷いて) 先生、ストーブつけたら暑いですよ。

ケイ うん。一応、まだ夏みたいだし。できれば勘弁してほしい。

りか そうですよ。ね・・・ヘーックシヨイツ。

髓子 抱いてあっためてあげようか？

りか ……気持ちだけでもらつとく。

宵子 ……りかさんが疾風と出会ったのが、去年の九月。『ヴードゥー人形の呪い』が出版されたすぐあと。そして、髓子ちゃんと会ったのが……

髓子 クリスマス。

宵子 シリーズ三作目の『透明人間消えます消えます』が出たあとね。

髓子 そのあとは？書いてないんですか、先生。

ケイ 本当は、この春、四作目を書く予定だったんだけど、あたし、体調をくずしてしまつて。

りか 疾風、ひまだったでしょうね。先生に書いてもらえなきゃ、なんにも出来ない奴ですもの。

宵子 でも・・・あたしが、疾風と会ったのは・・・この春よ。

髓子 でも、宵子さんの話は・・・先生の小説にはないお話なんでしょう。

ケイ ええ。

宵子 それで・・・それで疾風は、あたしに、なーんにもしゃべれなかったのかし

ら。

りか  
え？

宵子  
一緒に渚を散歩した時……。おしやべりしたのはあたしばっかり。何を尋ねても、彼はただ、あたしの目をじいっとみつめて、困ったようにちよつと笑って、首をかしげるばかり。

髓子  
誰かを待っているの？……って、それは言ったのよね。

宵子  
ええ、それだけは。

ケイ  
春野疾風が毎回言うセリフですもの。

りか  
“誰かを待っているの”か……。

宵子  
待っていたのかもしれない。

髓子  
え？

宵子  
あたし……待っていたのかもしれないわ……。

りか  
あたしを殺して……

髓子  
あたしを殺して……

宵子  
疾風は、今夜来るのかしら……。

ケイ  
……。

風音。

髓子  
疾風って、いい男。

りか  
え？

髓子  
だってそうでしょ。疾風は、あたしがあってほしい男で現れた。あたしが、嫌なふうには、決してならない。いつも、あたしたちが欲しい疾風でいてくれた。

りか そういえば・・・そうなのよねえ・・・。

ケイ 当たり前・・・。

三人 え？

ケイ あたしが、そういう男に書いたんですもの。あたしが、そういう男に産んだんですもの。

三人 ……そうね・・・。

ケイ 所詮、疾風は、あたしが書いたことをそのまんまやる男よ。いい男？・・・  
そうね、いい男かもね・“みなさんの疾風”は・・・。

りか でも、先生。あたし、なんだか、情けないです。先生、どうして、あたしはアパートの前ですべてって転んだの。

ケイ さあ・・・。

髓子 あたしだって、情けないよ。正ちゃんにも申し訳なさすぎるし。

ケイ 疾風を自分の思い通りにしようとした罰・・・ってとこかなあ。

髓子 そんなの・・・ひどい・・・。

りか 誰だって、好きな男を思い通りにしたいはずでしょう。先生、それはいけな  
いことなんですか？

宵子 殺してまでっていうのはどうかとおもうけど。

りか あなたは疾風と付き合いが浅いから、わからないのよ。

髓子 イカのぼっぼ焼き食べただけの仲なんだから。

宵子 ……ポ・・・ポッポ焼きだけってことは・・・。

りか そりゃ、あたしも髓子ちゃんも、思い通りの疾風にしたくって、それがかな  
わないとなったら、殺そうとして・・・。でも、あたしたちは・・・

髓子 疾風を好きだったただけなのに・・・

りか そう。

髓子　でも、疾風に愛されなくて・・・

りか　・・・そう・・・。

髓子　だから、あたしたちはッ

りか　疾風に殺された　・。

髓子　・・・あたしたちって・・・いったい・・・

りか・髓子　何ッ！

宵子　お悔みの言葉もないわ・・・。

ケイ　でも・・・もう大丈夫よ。

三人　え？

ケイ　疾風は、もう現れないわ。

髓子　え？

ケイ　春野疾風は・・・もう、決して、現れない。

顔を見合わせる、りか、宵子、髓子　・・・。

ケイ　・・・風・・・やんだわね・・・。

窓を見る三人　・・・。

ケイ　春野疾風は現れないわよ。・・・殺したから・・・。

三人　えッ？

ケイ　疾風・・・殺してあげたわよ・・・。

三人　・・・。。。

ケイ　（本棚から最新作を取り出す）今日、送ってきたわ（ポンと放って）春野疾

風シリーズ4“春野疾風の死と復讐”まだ、本屋さんにはならない最新作。

三人、本を覗き込む。

ケイ 春野疾風は、あたしが書いた男よ。あたしが殺すわ。

宵子 このシリーズ、終わっちゃうんですか。

ケイ うん、そう。

髓子 どうして？

ケイ あきたからよ。魅力、なくなったからよ。

りか それ、疾風のこと？

ケイ そうよ。

宵子 そんな……。春野疾風を生み出したのは、ケイ先生でしょう？

ケイ だから、なにをしてもいいでしょ。疾風は、もうステキじゃないのよ。疾風では、もう書けないのよ。だから、終わりにしたの。

三人 ……。

髓子 疾風は……。ステキよ。

りか そう……。疾風は……。いい奴だわ。

宵子 疾風は……。先生、疾風は、悲しそうな目をしてたのよ。先生、見たことあるの？疾風は……

ケイ そんなことツ……。そんなこと、あたしが一番知ってる……。あなたたち、何言ってるのよ。いい？春野疾風は、あたしが産んだの。そうでしょ。

りか そうだけど……。

ケイ 心配しないで。もう、迷惑かけないわ。彼は眠ったの。彼はね……。死んだ

んだから。

最新作を・・・その最後の方を読む三人。

髓子 ホントだ。

りか 死んでる・・・。

宵子 ……。

ケイ でしょ。安心した？

髓子 ……どうして、殺したの？

ケイ え？

髓子 どうして、あたしの疾風を殺したのッ。

ケイ なんべん言わせるのよ。疾風は、あたしが・・・

髓子 そんなこと聞いてないッ。ケイ先生は、疾風のことなんか、なーんにも知らないじゃない。

ケイ なに言ってるのよ。ばかじゃないの、あなた。

髓子 ばかじゃない。あたし、ばかじゃないわ。ケイ先生なんか、疾風のことなんにも知らないくせにッ。どうして疾風を殺すのよッ。

最新作を・・・その一番後ろのページにじっと見入っているりかと宵子。

ケイ だったら、教えてあげる。春野疾風の物語は一作で終わる予定だったのよ。

それが、売れたから、思いがけなく売れたから、出版社のいうままに、続編を書いただけよ。・・・ファンはありがたいわねえ。疾風にファンレターをく

れたわ。人気のバロメーター？そうよ。最初のうちは嬉しくないこともなか

った。でもね、だんだんイライラしてくるのよ。春野疾風は、あたしが産んだのよ。その疾風を、あたしよりも知ってるみたいなの、あたしよりも愛してるみたいな手紙……。不愉快よ。それなのに、あたしは、そういうファンにうける疾風を、そういうファンに愛される疾風を書かなくてはならなかった。あたしの疾風は、女を殺す男。ファンが小説を読んで、勝手に思い描いているような、優しい男なんかじゃない。優しさゆえに女を殺さなければならなかった男なんかじゃない。そんな優しい男じゃない。ただ、ただ、本能的に自分を守ってしまう男、そういう男なのよ。でも、あたしは、そういう疾風が好き。いらなのよ、皆なが知ってる春野疾風なんてッ。

髓子

……先生が……ケイ先生が、一番、疾風を自分の思い通りにしてる……。

本を手にしたまま、顔を見合わせるりかと宵子。

ケイ

りかさん、お茶飲もう。

りか

え？

ケイ

お茶入れて。なんだか寒いわ。

りか

さむい……んですか、先生……。

ケイ

うん。だって、もう夜明け近いんじゃない？一番、冷え込む時間だもの。

髓子

ケイ先生は、なんにも知らない。疾風はどんな匂いがする？疾風はどんなふうに動く？疾風はどんな溜め息をつく？

ケイ

お化け。

りか

え……。

ケイ

あたしが、こうやって、あんたとしゃべってるのは、誰のおかげだとおもってるの。

髓子

え……。

ケイ

お・ば・け。あんたなんか、あたしが、あつちの（上手ドア奥）ベッドでひとねむりしたら消えちゃうのかもよ。あたしの小説の中の男に殺されたあんたなんか……。そういうことわかってるの？

りか

先生……。

ケイ

もともと、生きてなんかいなかったんじゃない。人生に失敗して、ヤケクソになつてさ、そんな時、都合のいい男があらわれたら、またまた人生カムバックかあ？人なみに結婚なんかしてさ、おとなしくしてりゃいいのよ。それがなによ、感触だ、心だ？そんなものが、どんなに、まじめに生きてる、あんたのダンナを傷つけるかなんて、あんたには知ったこっちゃないんですよ。あんたたちなんて、最初っから生きてやしなかったのよ。自分でそれ、証明しちやった女たちじゃない。なに言ってるのよ。あたしが疾風を殺した？いいじゃない。少なくとも、あたしは生きてる。あんたたちになんかに、かれこれいわれる筋合いは、まったくくないのよ。

髓子

でも……。あたしは……。あたしたちは……。やっぱり、疾風と生きたのよ。

ケイ

で、殺されたのよ。でしょ？

りか

そうよ……。あたしは、疾風に……。殺された……。あたしたちは、疾風に殺された……。そして……。

髓子

？……

髓子、宵子から、本をひったくり読む。

宵子

髓子ちゃん……。

りか

先生ッ、お茶、いれますわ。あつたかいのがいいですね。うんと体があつた

まるの！（上手ドア奥へ）

早くね。

ケイ  
髓子  
……いい気味……。・（本を宵子に返す）

宵子  
髓子ちゃん　・。

髓子  
（ケイに）いい気味だわ……。・。

ケイ  
なによ、あんた……。・。

髓子  
すっごくいい気味ッ。

ケイ  
（無視して）りかさーん、お茶、早くねー……。・（宵子に）それ、ちゃんとも

とに戻しておいてよ。春野疾風の遺作なんだから。

宵子  
……。先生。ケイ先生。

ケイ  
なあに？

宵子  
（本の一番後ろのページを開いて）先生は、一九五四年生まれなんですネ。

ケイ  
それがなにか？

宵子  
鳥賊浜のすぐ近くで生まれたのね。

ケイ  
それが？

宵子  
光和学園大学文学部卒。

ケイ  
そうよ。前、ここに住んでた西貝先生の後輩。

宵子  
大手出版社に勤める　・。

ケイ  
長かったわよー。春野疾風で女流ミステリー賞もらうまで、あたし、OLだったんだから。あはは。信じられる？……。りかさーん、お茶、まだあ？寒いんだなあ。

宵子  
“春野疾風シリーズ”他、数々の人気ミステリー小説を書く。

ケイ  
その通り。

宵子  
一九九五年八月、急性心不全の為、死去。

ケイ え……？

宵子 ……先生の最新作のプロフィールに……そう書いてあります。

ケイ !

ケイ、宵子から本をひったくり読む……震え出す。

りか (出てきて) 先生、お茶が入りました。

お茶を配るりか。

茫然とたちすくむケイ。

りか お砂糖……入れましょね……(皆なのカップに砂糖を入れる)

髓子 ミルクも……たっぷり入れましょね(皆なのカップにミルクを入れる)

りか・髓子 いただきまーす(飲む)

宵子 ……(砂糖とミルクのたっぷり入ったコーヒーをかきまぜている)

りか 先生も。

髓子 冷めちやいますよ。

宵子 ケイ先生……。

ケイ、ゆっくりと椅子にすわり、本をテーブルの上に置く。  
カップを見つめるケイ……。

ケイのコーヒーをまぜて、手渡してあげるりか。

カップを手に取るケイ。そっと口をつける。

ケイ あったかい……。

りか でしょう。

お茶をすする四人 ……。

ケイ (むせる)

りか 先生……。

ケイ ……ハ……ハクションッ……ご……ごめん……。

りか ……一番寒い時間ですから。

髓子 皆な、寒いんです、先生。

ケイ ……やだあ……。

りか 先生。

ケイ ……へんなの……。

髓子 どうして？

ケイ ……ほんとなの？

りか たぶん……。

髓子 きつと……。

ケイ あたし……。

りか そうですよ。

ケイ ……。りかさんッ。

りか はい……。

ケイ りかさん……(りかの手を握る)

りか どうしたんです？先生。

ケイ なにかに……なにかにつかまっていたい感じ……。

髓子 よかったら、あたしにもどうぞ。つかまってください。

ケイ ありがとう。

ケイ、髓子の手にもつかまる。

三人、手を握りあった形になる。

宵子 ……。

髓子 仲間はずれにしてるつもりはないのよ。

宵子 わかってるわ……。

りか ひがまないでね。

宵子 わかっていますッ……でも……やっぱり、なんだか、花いちもんめでひとり残されたみたいな気分。

ケイ ごめん（手を離す）

お茶をすすする四人。

宵子 先生。春野疾風シリーズの第一作を見ていいですか？女流ミステリー賞を受賞した作品。

ケイ 何故？

宵子 だって……あたしだけ、どこにもいないんですもの。

りか やっぱり、ひがんでる……。

宵子 先生。あたしが会った疾風だけ、先生の小説のどこにもいないなんてへんじやありませんか。第一作目……春野疾風の誕生と苦悩……そういうタイトルでしたよね。

ケイ ……つまんないわよ、あんな小説。

宵子 でも先生。疾風がどんなふうに生まれたか……皆なだつて知りたいはずよ。

髓子 うん、知りたい。本当の疾風……先生が産んだ最初の疾風。りかさんの思い通りじゃない、あたしの思い通りじゃない春野疾風……あたし、知りた  
い。

ケイ だからあ、そんなのは、あたしが勝手に、あたしの思いこみだけの……

りか でも、そのおもいこみつてやつから、疾風は生まれたんですよ……

ケイ （本棚から、第一作“春野疾風の誕生と苦悩”という本を取り出して、しぶしぶ読む）“沖から強い風が吹いてきた。春の嵐である。渚には、色とりどりの貝殻たちが、あたかも男に遊ばれることが宿命の女のように、さんざめいていた。美しい貝殻のひとつが、男の裸の足を刺した。男は微かに眉根をよせ、それを手に取り口に含むと、軽い音をたてて砕いた。貝殻は、男の唇からこぼれ、渚に消えた。「僕をうらむかい？」そう呟き男はふつと微笑んだ。春の疾風……春野疾風……渚にたたずむその男に、神は、その時、そう名付けた”

髓子 ぶんがくてきね。

ケイ （本を放り出し）気どつた文章！ウケねらいのセンス！いやんなっちゃ  
うわ！……こんな話よ……所詮、こんな男のこんな話なのよ、このシリー  
ズは！

髓子 でも、春野疾風は、そんなふうに生まれた男だったのね。知らなかったわ。  
感動したわ。りかさん、これからちゃんと小説も読みましようね。微笑ばっ  
かり読んでちゃダメなのよ。

りか どうして知ってるの？

宵子、ケイが投げ出した“第一作”を手に取り、ページをめくり

宵子 やだ、先生。あたしの・・・あたしの疾風がいるじゃありませんか。

三人 え・・・？

宵子 疾風シリーズ一作目に・・・あたしの疾風と、あたしがいるじゃない。(読む)“その黒いたてがみをもった犬は言った”

ケイ 犬？

りか たてがみ？なんです、それ？

ケイ し、知らないわよ。

髓子 たてがみって普通、馬じゃないですか？

ケイ 知らないったらッ。

宵子 “君の命令に従うよ”

りか え？警察犬が出てくる話、書いたんですか？先生。

髓子 犬がしゃべるんですか？

ケイ 書いてないわよ、そんな話ッ。

宵子 “それで君が僕を好きになってくれるのだったら、僕は君に従うよ”

髓子 やっぱり、犬がしゃべってる。

りか 先生、いいかげんにしてくださいね。

ケイ 書いてないったらッ。

宵子 “けれど、女は言った。あたしがあなたを好きになるのは、あなたがあたしに従うからじゃないわ。あなたがあたしを抱いてくれるからなの”

髓子 いったい、どういう話なんですか？

りか ほんつとに、かげんにしてくださいね、先生ッ。

ケイ 知らないってばッ。

宵子 “そして、その抱き方がとても怖いからなのよ”

ケイ あの人の、作ってる・・・あの人、作ってるわよッ。

りか・髓子 え？

宵子 （本から顔をあげ）“疾風は言いました。でも、君は知ってる？女に従うことが、女に好かれるようにふるまうことが、男にとってどんなに疲れることか。けれど、男は、時には、それをやろうとする。所詮、女相手だ。大の男が軽くやってのけられる範疇のことじゃないか。辛いはずなんかありっこないじゃないか。だってさ、俺はさ、男なんだぜ・・・そのつもりなのに、わかってるはずなのに・・・俺にはできない・・・宵ちゃん、俺は、きつと犬だ。君だけの・・・君だけの犬だ。けど、犬は、ふっとおもうんだ・・・

このままでいいのかよって。これがためえの本音なのかって。本音であるわけねーよ。そうわかった瞬間、俺はキバをむくんだ。俺はさ、宵ちゃん、やっぱり犬にはなれないかもしれないよ。ねえ、宵ちゃん、男はね、女を守りたいくせに、女を傷つけたいんだ。女に殺されたいのに、女を殺したいんだ

”

ケイ ・・あたしは・・・書いてない・・・そんなセリフ・・・。

宵子 先生・・・これはこのまんま・・・男と女を逆にして、先生の最新作の最後の一行だわ。“春野疾風シリーズ4・春野疾風の死と復讐”・・・（テーブルの上の本を見る）

ケイ え・・・？（本を開く・・・）“女は・・・男を守りたいのに、男を傷つける。男に殺されたいのに・・・男を殺すのだ”・・・。

宵子 先生に殺されて、疾風は言葉をなくしたのかも。先生にセリフをもらえなくなったから、疾風は何もしゃべれなくなったのかも・・・でも、疾風は手紙をくれた。あたしに、会いたいと書いてあったわ・・・先生、あたし覚えて

ます。疾風の目・・・なーんにもしやべってくれなかったけど、あたしをじつとみつめていた、疾風の目・・・先生、これは、あたしのひとりよがり？結局、疾風を自分の思い通りにしか愛せないあたしの自分勝手？

ケイ あたしは・・・疾風を殺したつもりだったわ・・・。それなのに・・・それなのに・・・あたしが・・・死んだ・・・。

波音・・・いつの間にか、夜があげている。

ケイ ここに来てから起こったのね・・・。

りか え？

ケイ この家に住むようになってから・・・いろんなことが起こった。烏賊浜市烏賊浜、浜辺・・・番地なし。

宵子 え？

ケイ こここの住所。“烏賊ホテル・朽田ケイ様”それで郵便物はすべて届くよ・・・西貝先生、そう言ってたわ。ホントに届いた、あたしの最新作。あたしの遺作・・・。

髓子 烏賊ホテル・・・。

りか 先生。あたし、西貝先生から聞いたことありました・・・。あたしの店で、つぶれちゃったあたしの店で、西貝先生、話してくれたことがありました。なにを？

りか 烏賊の話。中国の古い説話にこんな話があるんだって。死んだふりをして海に浮かんでいたイカを鳥がつかいばむと、イカはやにわに鳥をくわえこみ、海の中にひきずりこんで食べてしまった・・・それが、烏賊って文字の由来だよって、西貝先生は言ったわ。

髓子 死んだふりをして・・・殺す・・・。

りか イカってカタカナじゃないんですかと、教養のない不動産屋の亀田さんが言ったの。あたしは鼻で笑ってやったけど、実は、あたしも知らなかったの。イカってどういう字書くの？今でもわかんない。けどさあたしね、その時、その西貝先生の話、へんだっておもったのよ。

ケイ へんって？

りか イカは死んだふりをしてたわけじゃないんだよ。あたし、地元の漁師さんから聞いて知ってるもの。イカはね、産卵して、卵を産んで疲れて、ただ休んでただけなんだよ。それをさ、烏が勝手に死んでるっておもってくらいだっただけなの。烏が勝手に死んでるってただけなの。烏の勝手なのよ・・・あはは、間抜けな話だよね。

三人 ……。

宵子 ……りかさんって好き。こんなふうに会わなかったら親友になっちゃったくらい好き。

髓子 ……あたしも、結構、好き。

りか え？・・・やだやだ。オニギリ食べる？ご飯、炊こうか。おしんこ、出しちやうよッ。

宵子 りかさん・・・。

ケイ ……マコロン食べたいな・・・。

髓子 (マコロンを口に入れてあげる)

ケイ ありがとう(マコロンを食べる)・・・ねえ、死んでるって不思議。どうして生きてることとこんなに似てるの？

宵子 似てる？

ケイ そうよ。・・・なんだか、いやにマコロンが食べたくて、へんだなあとはお

もってたの。でも・・・こういうこととは、すこしも繋がらなかったわ・・・  
ねえ、りかさん、あたし、甘いものなんて、きれいな女だったよね。

りか 体質・・・かわるみたいですよ。

ケイ 知らないうちに疲れてるのかしらとか・・・そんな、幸福な心配を・・・それも、ほんの少ししかしてなかった。・・・ねえ、なんだか淋しい・・・なんだかむしように寒いわ。いろんなことが、自分の体の中を流れていく感じ・・・。ねえ・・・ホントはさ、疾風は、一番・・・あたしのものなんかではなかったのよね。それが証拠に、彼は、あたしにだけ逢いにこなかった・・・。“海”のそばに烏賊ホテルという家があります。ばあさんがひとりで住んでいる小さな家です”。・・・ばあさんとは、よくも言ってくれたわね・・・はつきり言って、超むかつくツ・・・。でも・・・そうなのかも。(ふっと笑って)今のあたしは、マコロンが欲しいだけのただのばあさんなのかも・・・。

髓子 (胸がいつぱいになって) 全部あげるツ(ト、袋ごとあげる)

ケイ ありがとう。

宵子 ・・・ねえ、ケイ先生。

ケイ ん？

宵子 ・・・あたし、疾風に会えるかしら・・・？

ケイ え・・・？

りか あたしに殺されて

髓子 あたしに殺されて

ケイ あたしに殺されて・・・。

宵子 ・・・あたしは疾風に会えるのかしら？疾風は、ここに来るのかしら？

窓をあけるケイ。

波の音と、朝の光が入ってくる。

ケイ 朝だわ・・・。

りか 朝になったのね・・・。

ケイ まだ・・・生きている人がいる・・・朝・・・だわ・・・。

りか 先生・・・。

髓子 宵子さん、疾風・・・きつと来るよ・・・。

ケイ あなたに逢いに・・・疾風は、きつと来るわ。

りか ちよいとシヤクだけどさ・・・。

三人、静かに宵子を見る。

宵子 ……あ、あたしだけじゃだめよ。

ケイ 何言ってるのよ。

宵子 ひとりじゃだめよ。ひとりにしないで。皆なもいてよ。

髓子 それは無理だわよ。

宵子 何故？

髓子 ……きえなくちゃ。

宵子 え・・・。

ケイ 朝だもの。

髓子 消えなくちゃ。このまんまじゃカッコ悪いの、わかるでしょ。

りか 幽霊だもの・・・あたしたち。

宵子を見つめる三人。

宵子 ……皆な、その目付きはずるいよ。そんなッ、眠そうな目、ずるいッ。

波音。

髓子、ソファに横たわる。

宵子 髓子ちゃんッ。

髓子 おやすみ、宵子さん。おやすみ、皆さん。

宵子 待ってよ、髓子ちゃんッ。

髓子 (首を横にふる) おやすみ。

髓子、ソファの背に消えて、見えなくなる。

ケイ、のそのそと衝立て脇のマコロンのダンボールに入る。

宵子 ケイ先生ッ。

ケイ なんだか、すごく消えたいって気分なの。でも、不思議ね。ここから離れたくないって気分なの。……おやすみ(ダンボールに消える)

宵子 先生……。

大欠伸するりか。

宵子 (はっとして) りかさんッ、りかさんはいてくれるよね。消えたりしないよねッ。

りか ……消えたかないわよ。

宵子 え？

りか 消えたかないって言うてんのッ。

宵子 りかさん……。

りか ……しゃんとしなさいよ……あんた。

宵子 え……。

りか しゃんとするのよ。でしょ？……あんただけなんだから。

宵子 りかさん……。

波音 ……。

りか (宵子を強く抱きしめる) あー、消えたくないなあ！

宵子 りかさん ……。

りか、上手ドアへ。

宵子 ど、どこ、いくの？

りか 台所。お手伝いさんだもん……おやすみ……。いい夢をね……。 (消える)

宵子 ……秘書だって言ったくせにいッ……。

ひとりぼっちになる宵子。

宵子 ……ね、ねえッ、ひとりぼっちにしないでよおッ。ねえッ、皆なッ。

宵子、ソファの髓子のところへ……クッションがあるだけ。

ダンボールのケイのところへ……からっぽ。

上手のドアにとびこんで

宵子

りかさーんッ！……（しょんぼり出てきて眩く）りかささん……りかささんも、いい夢をね……。いいな……。皆な、一緒なの？……皆な、いいな……。いいなッ、ユーレイはッ。

微かな風音……。

宵子

……。神様……。いるんならおしえて。皆なは、今、あなたのそばなの？あなたのそばに……。いるの？でも……。でもあたしはひとりぼっちよ……。ひとりぼっち……。

風音。

音楽” DESDE LEJOS (From Far Away)” ↓すずくに、ON

宵子

（風の音に気付く）！……。疾風……。？

応えるかのように風音。

宵子

（風音に耳を澄ませる。そして……。前略……。元気です。あなたを覚えてます。烏賊浜にきました……。9月23日に来ました……。烏賊ホテル

に

います。女が住んでいる小さな家です……。よかつたら一緒に泊まって、

よかつたら一緒に寝ませんか……。あなたを……。あなたをうらんでません  
……。春野疾風さま……。

風音、大きくなって……。中央のドアがぱたんツと開く。

宵子

?! (見て)……。疾風?……。疾風なのねッ……。疾風……。来て。疾風……

おいでッ、疾風ッ! (大きく腕をひろげる)

宵子めがけて吹いてくる一陣の風……。

ソファから顔を出す髓子……。ドアを見つめる。

ダンボールから顔を出すケイ……。ドアを見つめる。

上手ドアから顔を出すりか……。ドアを見つめる。

宵子

疾風……。グードッ! (抱きしめる)

ケイ、りか、髓子……。宵子と疾風を……。見守る……。

風の音……。さらに大きくなって……。

幕

